

Title	Molecular Basis of the Ligand-binding Specificity of $\alpha v \beta 8$ integrin
Author(s)	小澤, 明央
Citation	大阪大学, 2018, 博士論文
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/72177">https://doi.org/10.18910/72177</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 論文内容の要旨

氏 名 ( 小澤 明央 )	
論文題名	Molecular Basis of the Ligand-binding Specificity of $\alpha v\beta 8$ integrin ( $\alpha v\beta 8$ インテグリンのリガンド結合特異性の分子基盤)
論文内容の要旨	
<p>細胞の周囲には細胞外マトリックス (ECM) と呼ばれる繊維状、網目状の構造体や液性因子が存在し、細胞表面のインテグリンを介して細胞の運命を制御している。Arg-Gly-Asp (RGD)結合型インテグリンの一つである<math>\alpha v\beta 8</math>インテグリンは、RGDモチーフを介してフィブロネクチン、ビトロネクチン、TGF-<math>\beta 1</math>といったECMタンパク質と結合することが報告されている。しかし、他のRGDモチーフを含むタンパク質 (以下、RGDリガンド) に対して、<math>\alpha v\beta 8</math>インテグリンがどのような結合特異性を有するか、これまでに網羅的な検証はされていない。本研究では、<math>\alpha v\beta 8</math>インテグリンのリガンド結合特異性を精査するために、<i>in silico</i>スクリーニングにより抽出してきた25種のRGDリガンド (①RGDモチーフを含む、②細胞外に分泌される、③RGDモチーフが脊椎動物間で高度に保存されてある) に対する<math>\alpha v\beta 8</math>インテグリンの結合活性を、生化学的手法を用いて比較検討した。その結果、<math>\alpha v\beta 8</math>インテグリンはTGF-<math>\beta 1</math>と強く結合し (<math>2.3 \pm 0.2</math> nM)、一方で他のRGDリガンドに対しては低い結合活性を示した。また、同じRGD結合型インテグリンである<math>\alpha v\beta 3</math>インテグリンは、25種のRGDリガンドに対して広範な結合特異性を示し、かつTGF-<math>\beta 1</math>に対しては低い結合活性を示した。以上の結果から、<math>\alpha v\beta 8</math>インテグリンはTGF-<math>\beta 1</math>に高い特異性を示すことがわかった。TGF-<math>\beta 1</math>は<math>\alpha v\beta 8</math>インテグリンの生理的リガンドであり、両間の結合は発生初期の血管新生に重要であることが報告されている。本アッセイで示された<math>\alpha v\beta 8</math>インテグリンのTGF-<math>\beta 1</math>に対する高い特異性は、両間の相互作用の生理的重要性を支持する。</p> <p><math>\alpha v\beta 8</math>インテグリン-TGF-<math>\beta 1</math>の高親和性結合のメカニズムを明らかにするため、TGF-<math>\beta 1</math>のアミノ酸の部位特異的変異導入による検証を行ったところ、RGDモチーフのすぐ後に続くLeu-218が、<math>\alpha v\beta 8</math>インテグリンに対する高親和性結合に要求されることがわかった。ペプチドを用いた阻害アッセイの結果、<math>\alpha v\beta 8</math>インテグリンはLeu-218を認識するが、<math>\alpha v\beta 3</math>インテグリンは認識しないことから、<math>\beta</math>鎖の違いがTGF-<math>\beta 1</math>に対する特異性を決定することが示された。TGF-<math>\beta 1</math>に対する高親和性結合に寄与する<math>\beta 8</math>鎖の領域を特定するために、<math>\alpha v\beta 8</math>インテグリンと<math>\alpha v\beta 3</math>インテグリン間の<math>\beta</math>鎖のスイッチ実験を行った。その結果、<math>\beta 8</math> I-like domainがTGF-<math>\beta 1</math>に対する高親和性結合に必要であることがわかった。しかし、これまでにリガンド結合特異性に関わると報告されていた、<math>\beta</math> I-like domain中に存在するDisulfide-linked loop領域は、TGF-<math>\beta 1</math>に対する高親和性結合に寄与しないことが示された。最後に、<math>\alpha v\beta 8</math>インテグリンとTGF-<math>\beta 1</math>由来のペプチドの複合体の構造予測を試みたところ、TGF-<math>\beta 1</math>由来のペプチド中のLeu-218の周囲に<math>\beta 8</math>鎖由来の複数の疎水性アミノ酸がポケットを形成しており、疎水性相互作用している可能性が示唆された。以上より、<math>\alpha v\beta 8</math>インテグリンはTGF-<math>\beta 1</math>に対する高い結合特異性を有し、TGF-<math>\beta 1</math>に対する高親和性結合は、Leu-218と<math>\beta 8</math> I-like domainの相互作用により決定されることが明らかとなった。</p>	

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 ( 小澤 明央 )	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主 査 教 授 高 木 淳 一
	副 査 教 授 三 木 裕 明
	副 査 教 授 岡 田 雅 人
	副 査 招へい教授 関 口 清 俊

## 論文審査の結果の要旨

本論文 (Molecular basis of the ligand-binding specificity of  $\alpha\beta 8$  integrin) は、多細胞生物の主要な接着受容体であるインテグリンファミリーの中で、比較的研究が進んでいない $\alpha\beta 8$  インテグリンに着目し、主にそのリガンド認識特異性という観点から生化学的な結合メカニズムの解明に取り組んだものである。 $\alpha\beta 8$  インテグリンは RGD 配列を含むリガンドを認識する、いわゆる RGD 依存性インテグリンとして知られていたが、膨大な数存在する RGD 配列含有タンパク質に対して網羅的な解析はされていなかった。

本論文では、ヒトタンパク質配列データベースから実質的にリガンド候補となり得る RGD タンパク質をインシリコで 29 種類ピックアップし、それらをすべて組み換え発現により精製、組み換え可溶性 $\alpha\beta 8$  インテグリンとの結合アッセイを実施して、TGF- $\beta 1$ が $\alpha\beta 8$  インテグリンに対する極めて特異性の高いリガンドであることを証明した。続いて、同じアッセイ系を利用し、様々な変異体を用いた実験から、 $\alpha\beta 8$  インテグリンによる TGF- $\beta 1$ の認識には RGD 配列の直後の Leu 残基が必須であること、インテグリン側では $\beta$ 鎖の Disulfide-linked loop (DLL) と呼ばれる領域が TGF- $\beta 1$  特異的な認識を制御していること、などを解明した。これらの研究成果は、これまで一般に promiscuous であると認識されてきた RGD 依存性インテグリンの中でも、 $\alpha\beta 8$  インテグリンが TGF- $\beta 1$  特異的受容体というユニークな性質を獲得できた構造的基盤を、緻密な生化学的分析で明確にした成果であると評価できる。よって、本論文は博士 (理学) の学位論文として十分価値あるものと認める。